

大学院社会文化科学研究科文明動態学シンポジウム

モニュメントから見る文明動態論

会場：岡山シティーミュージアム 4階講義室

日時：2018年2月24日（土）13:00～16:00

定員：80名（予約なし。先着順。）

費用：シンポジウムは無料ですが、ミュージアム入館料（300円）が必要です。13:00ー

13:10 挨拶、趣旨説明

13:10ー14:10

講演1 杉山三郎

テオティワカン考古学の近況ーモニュメント、儀礼、戦争と都市生活ー

概要：弥生時代とほぼ併行する時期に世界最大の都市であったテオティワカン（メキシコ）における近年の発掘調査の成果から、現代に繋がる都市の起源、ピラミッドのさまざまな機能、戦争と生贄儀礼の実態を考える。発表者による1980年代の「羽毛の蛇神殿」調査、1990年代～2000年代前半に行った「月のピラミッド」総合調査、2010年代の「太陽のピラミッド」内部調査、さらに近年の都市中心部における他の調査団の成果を統合し、新たに明らかとなった古代計画都市の形成過程に迫る。

14:20ー15:20

講演2 松木武彦

文明動態論からみた日本列島の古墳時代ー都市なき初期国家の謎ー

概要：日本列島の古墳時代は、エジプトのピラミッドや中国の始皇帝陵に匹敵する規模のモニュメントー巨大古墳ーが、比較的狭い国土に林立するという、世界にもあまり例のないユニークな社会であった。あまつさえ、武器の発達は著しいけれども受傷人骨や防御施設のような戦争の証拠に乏しく、さらには都市がほとんど発達しないという特異な社会をへて、国家形成への道を歩んだのである。古墳研究の最新の国際的動向から、その理由やメカニズムに迫る。

15:30ー16:00

討論 杉山三郎・松木武彦（司会：松本直子）

中南米における都市や国家の形成を考えるうえで重要な遺跡であるテオティワカンと、日本列島における弥生・古墳時代のあり方を比較する。テオティワカンで計画的に配置されるピラミッドと、日本列島の巨大古墳を生み出したものは何か。それぞれの地域における特異性や、それを超えて見られる文明動態のメカニズムについて考え、人類社会の持続可能な発展についても展望する。